

喜多流 第45回

中尊寺 薪能

5月28日(火) 10時 千ヶツト発売開始

令和6年8月14日(水)午後4時半始
中尊寺白山神社能舞台

祭儀
火入之儀

仕舞 卷 絹クセ

塩津 畫介

和泉流

狂言 横座

野村 万作

アト・牛

飯田 豪

アト・鶴

石田 幸雄

シテツレ・夫女

谷 友矩

シテツレ・男

佐藤 寛泰

後シテ・水室の神
前シテ・老翁

佐々木 多門

能 氷室

宝生 常三

ワキツレ・鏡者

館田 善博

ワキツレ・從者

梅村 昌功

アト・末社の神

野村 萬齋

奉賛観能券

S 一〇、〇〇〇円

A 七、〇〇〇円 (当日八、〇〇〇円)

B 四、〇〇〇円 (当日五、〇〇〇円)

学生 三、〇〇〇円

お申込み 中尊寺薪能の会 電話(〇一九二)四六一二二一〇

※雨天も催行(正面席は屋根架設) ※写真撮影・録音・録画不可

終演予定 一九・〇〇頃

一六・三〇

一六・四五

一七・三五

〈喜多流〉

中尊寺 薪能

たきぎ のう

一六・三〇一

祭 儀 白山神社宮司

火入之儀 薪能奉行

仕舞 卷 絹 塩津圭介

地謡

狩野祐一
内田成信
金子敬一郎
友枝真也

和泉流 アド・何某

狂言 横座 シテ・牛主
野村万作
飯田 豪

アド・牛

後見 破石澄元

(休憩)

一七・三五一



写真「横座」 万作の会 提供

能 氷室

後シテ・氷室の神
前シテ・老翁

シテツレ・天女
シテツレ・男
シテツレ・男
シテツレ・老翁

室 佐々木多門
宝生常三

ワキ・臣下
ワキツレ・従者
ワキツレ・従者
アイ・末社の神

大鼓 亀井洋佑
小鼓 森 貴史
太鼓 小寺真佐人
一噌隆之

後見

塩津哲生
中村邦生
友枝真也
金子敬一郎
内田成信
大島輝久

地謡

友枝雄人
長島 茂
出雲康雅
狩野了一

一終演予定 一九・〇〇頃

仕舞「巻絹クセ」

天神が乗り移った巫女。神に和歌を手向けた男の罪を救い、歌のめでたき功德を語り舞う。

狂言「横座」

ある男が最近手に入れた牛の目利きを頼みに博勞(牛主)を訪ねる。ところがその牛は、いなくなつた博勞の牛であつた。証拠に「横座」と名を呼べば鳴くという。三回名を呼んで鳴けば牛を返すが、鳴かなければ男の下人になるという条件を出された博勞だが、二度呼んでも反応しない。いよいよ困つた博勞は、牛に向かつて切々と語りかける。

能「氷室」

龜山院の臣下(ワキ)と従者一行(ワキツレ)が、丹後国(現京都府北部)から都へ帰る途中、毎年、天皇へ献上する水を作る、氷室山に立ち寄ります。そこで、氷室を守る老翁(前シテ)と男(前ツレ)と出会います。臣下の問いに、老翁は氷室の由来を語り、暑い夏でも、この室の水が融けてしまわないのは、天皇の威光が世の中にゆき届いているからであると明かし、この場所で行く、水調の祭(水を天皇に捧げるための祭)を行ひ見せようと言ひ、氷室の中へ姿を消してしまいます。

氷室明神の末社の神(アイ)が、臣下たちに氷室の由来を語り、雪が降るように雪乞いをします。夜になると、妙なる音楽が天空より聞こえ、天女(後ツレ)が現れて優美に舞を舞います。次に氷室の中より、明神(後シテ)が厚い氷板を持って出現。凍てつく雪と氷の世界を見せて、氷室明神は、天皇に献上する水を陽光で融かさぬように、冷たい水を注ぎ、清風を吹かせて臣下に渡します。急ぎ早く都に届くようにと見守り送るのでした。

能「氷室」の舞台となっている丹波国には、宮中献上用の氷室があつたと伝えられます。夏まで融けぬ水で涼をとる内容は、まさに暑気にふさわしい曲です。

表「氷室」使用写真 中村邦生 所演